

## EFL学習の環境と動機づけ—自己決定に基づく読解、思考、討論

倉橋 洋子

The Environment and Motivation of EFL Learning : Reading,  
Thinking and Discussion by Self-directed Learning

Yoko KURAHASHI

The number of required credits of English as a Foreign Language (EFL) in universities has been decreased since “Taikoka” in 1991 as a whole. However, there are some universities, which regard EFL as an important subject. As a result, there is a significant difference between universities in required EFL credits. In addition, it is predicted that the difference of English ability will be extensive between public and private middle and high schools because of a new course of study announced in 1998 and 1999 by the Ministry of Education.

With regard to the Japanese EFL learners’ environment, there are not many opportunities for them to use English during their middle and high school days. It is important to think of English classes in which they will be able to acquire English while using the language. Moreover, motivation is one of the most important factors of EFL learning. As has been reported, self-directed learning is effective on motivation as an intrinsic interest. Therefore this concept of self-directed learning should be introduced into English classes and developed further.

Considering the environment of Japanese EFL learners and motivation, I conducted an English class motivated by self-directed learning. The goals of the class were (1) to make learners think of world social problems and affairs, (2) to give them opportunities to use English and (3) to develop their English reading and communication abilities using English. The class was able to motivate the learners to be interested in world affairs and to communicate in English using oral skills.

## はじめに

グローバル時代に、世界の情報をインターネットや新聞、雑誌、書物等から入手する機会は、今後ますます増加してくると思われる。情報を理解し、思考した上で、世界の人々とコミュニケーションを図るために、世界で広く使用されている世界共通語としての英語が必要であることは否定しがたい。<sup>1</sup>しかし、1991年の大学設置基準の大綱化以来、大学間の英語教育の質と量の格差は著しくなってきた。また、2002年度から施行される「学習指導要領」により、公立と私立の中学校における授業数の格差も広がるであろう。本稿では第一に、このような大学の英語教育の現状と、「新学習指導要領」によって生じると予測される日本人の英語力の格差を分析する。次に、日本人 EFL (English as a Foreign Language) 学習者の学習環境と動機づけについて考察する。その上で、英語は世界共通語として必要であるとの立場から、予測される英語力の格差に対処すべく実践した授業の報告、および提案を行いたい。その授業は、日本人 EFL 学習者の学習環境に対する考察を踏まえ、英語での情報理解に必要な読解(受信)、その情報に対する思考、英語での討論(発信)に対する動機づけに重点を置いて立案された。

### 1. 英語教育を取り巻く状況

1991年の大学設置基準の大綱化以来、大学における英語の必修単位数に大学間で格差が生じてきた。大綱化以前は、第一外国語の英語は8単位(1単位=半期間、週1回90分で大半が開講)必修であり、第二外国語は6単位から8単位の必修扱いが奨励されていた。しかし、大学英語教育学会実態調査委員会が、2000年の9月から10月に全国の国公立及び私立の短大と4年制大学に対して調査を実施し、360の学部、学科から得た回答によると、英語の必修単位数は全体として減少傾向にある。具体的には、英語の必修単位数は0単位が14.2%、1~4単位が38.3%、5~8単位が31.4%、9~12単位が3.9%で、12単位を越える場合は9.4%である。また、選択英語の履修の可能な単位数は、4単位以下が31.7%、5から10単位以下が28.5%、11~16単位以下が9.7%、18単位以下が1.1%、18単位を越える場合は16.9%である。全体としては英語の必修単位数は減少傾向にあるが、英語を重要視する大学と、そうでない大学とが二極化している。英語以外の外国語の必修単位数は0単位が51.4%になり激減した(伊部他2001)。

このような格差にも関わらず、ほとんどの大学では入学試験において英語を課している。これはグローバル時代における英語の必要性を認識していることの表われであろう。また、私立大学1年生116名に実施したアンケート結果によると、大学生も英語学習の重要性を認識していると考えられる(資料1参照)。具体的には、将来英語が必要であると認識している学生は88%に昇り、また90%の学生が英語を使えるようになりたいと思っている。さらに、大学での英語教育の必要性を88%が認識し、その理由として、34%が「国際社会で必要だから」、31%が「将来仕事上で有利になるから」の項目を選択している。しかし、前述したように、大学

での英語教育には大学間で格差があるものの全体としては弱体化傾向にある。このように今日の日本の大学における外国語としての英語教育に関する現象は矛盾している。この矛盾した現象の原因には、英語の必要性は認めつつも、卒業必要単位数の減少の影響、英語の不得意な学生への迎合、あるいは従来の英語教育への批判等も存在するであろう。

他方、文部省（現文部科学省）は現在の大学の傾向には触れず、大学設置基準の大綱化から7年後の1998年に中学校の「新学習指導要領」を、1999年に高等学校の「新学習指導要領」を告示した。外国語に関して言えば、その特徴は、(1)外国語を通じて言語や文化の理解を深めること、(2)積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること、(3)外国語の実践的コミュニケーション能力を養うことである。また、初めて外国語が必修となり、英語が履修科目として選ばれた。これは従来から指摘されている日本人の英語でのコミュニケーション能力不足を解消するための、英語教育の内容の変革であろう。この「新学習指導要領」は中学校では2002年度、高等学校では2003年度から施行されることになっている。また、1998年告示の小学校の「新学習指導要領」により、小学校では2002年度から「総合的な学習の時間」に「国際理解に関する学習の一環として外国語会話等」が一部で実施されるようになる。これにより小学校、中学校や高等学校で、従来にも増して、英語のコミュニケーション能力を強調する英語教育が展開されることになるであろう。

ところが、「新学習指導要領」が現行の「学習指導要領」と異なる点の一つは、「各学校が実状にあわせて内容を適切に定める school-based curriculum」（船城1999）であるので、学校や地域の特色を生かした英語教育も可能である。もっとも、「語数や言語材料を極端に制限しているので検定教科書も、似たり寄ったりで生徒や学校の実体にあったものが出て来ない可能性がある」（船城1999）と指摘されているように、実施状況をみるまで期待できない部分もある。「新学習指導要領」で強調されている英語のコミュニケーション能力は必要であるが、書かれた英語を理解し、英文を書く能力も必要である。英語のコミュニケーション能力が挨拶程度に留まらないためにも、バランスの取れた英語教育が必要であると考えられる。

英語教育の量に関して言えば、「新学習指導要領」に従うと現在より減少する。現在公立中学では、英語の標準授業時数（1単位時間は50分）は、年間105～140までであるが、それが105になる。高校での英語の授業時間数は標準単位数が3年間で1単位（1単位時間50分で35単位時間分）減少する。また、私立中学と公立中学での授業数とを比較すると、2002年度から私立の授業数が圧倒的に多くなる。例えば、東京都、埼玉、千葉、神奈川県私立中学193校の平均で、2002年度の英語の授業数は、「新学習指導要領」による授業数の1.9倍になる（朝日新聞2002.1.4）。語彙数に関して言えば、公立中学では、必修語が507語から100語に、全語彙は1000語までから900語に減少する。高等学校では、 $1400 + \alpha$  から  $1300 + \alpha$  に減少する。授業時間数に伴う「教材の厳選」ということが先行して語数が決まったと言ってもよいか

もしれない(村田2002)。このように英語教育の量の面においても、今後ますます公立と私立間、「学習指導要領」改定以前と以後の学習者間等の格差が広がっていくと予測される。

さて、このように予測される英語力の格差は、日本人の社会生活においてどのような影響を与えるであろうか。小渕恵三元首相の私的懇談会「二十一世紀日本の構想」は、2000年1月にまとめた報告書で、「長期的には英語を第二公用語とすることも視野に入ってくるが、国民的議論を必要とする」(1章)と提言した。「英語公用語化」とは全ての公文書を日本語と英語で併記することである。その必要性に対して賛否両論の議論が専門家のみならず門外漢によっても活発に行われた。反対論の中には、英語を使える者が有利になり、英語を使える者と使えない者との格差が生活面に影響を落とすとの指摘もあった。「英語公用語化」における英語力の格差の影響は極端な例である。しかし、世界共通語としての英語力の格差が、日本国内外の情報を理解し、思考した上で、自己の考えを他者に伝達する必要に迫られるグローバル時代の生活のあらゆる面において影響を与えることは容易に予測できる。

## 2. 日本人 EFL 学習者の学習環境

英語は必要であるものの、日本人の EFL 学習者の問題点は、学習環境に決して恵まれてこなかったことにある。特にコミュニケーション能力に関して言えば、EFL 学習者の大半は大学生になるまで、教室の内外において英語で自己表現する経験が皆無に等しく、たとえ教室内外で多少経験を積んだとしても、挨拶程度に留まっている。学習者には挨拶も含め、自分の考え、意見を英語で相手に伝達するような実際的な目的のために英語を使用する機会が必要である。海外での語学研修や留学制度はその点で有効であるが、中高生全員にその制度を利用させることは物心両面において不可能に近い。

また、ほとんどの EFL 学習者は大学生になるまで、現実的な目的、すなわち自分の研究、他の教科目、教養、あるいは日常的な目的のために英文の資料を読んだり、英文を書いたりする機会にほとんど恵まれていない。学習者は EFL 学習のための教材を与えられるのを待つという受け身の学習である。すなわち、EFL 学習のための学習であって、ある目的のために英語を使用する学習ではない。その結果、英語のレベルを第一に選別された教材は、内容が学習者の知的好奇心、目的に適さず、学習者はそれに興味を示さないこともある。したがって、大学での外国語としての英語教育において、実際的な目的のために英語を使用する機会を設け、使用しながら英語力を育成するように学習環境を整え、学習者の EFL 学習に対する動機づけを図る必要がある。

## 3. EFL 学習者の動機づけ

日本国内では実際的な目的で英語を使用する機会に恵まれず、英語の利便性を経験したこと

の少ない日本人 EFL 学習者は、大学での英語学習に対し、容易に動機づけされるであろうか。Berwick と Ross (1989) の報告によると、日本人の大学生の中には、大学の入学試験に合格するために英語学習に対して強い道具的動機づけ (instrumental motivation) を持っていたも、一旦、大学に入学すると喪失する者もいた。また、Ellis (1997) は、Gardner と MacIntyre (1992) を引用して、「第二言語学習に対する道具的な理由 (instrumental reason) を持った学習者は成功しうる」が、その効果は報酬が終了するや否や、失われると述べている。すなわち、道具的動機づけは、第二言語としての英語学習と外国語としての英語学習の両者において、報酬がない場合には継続性がないと言える。さらに、よい成果が上がるのと次の学習の動機づけになる成果的動機づけ (resultative motivation) も、学習の当初かなり低い動機づけの場合には成功するが、強い場合には成功しないようだ、と Ellis (1997) は Berwick と Ross の報告を基に指摘している。また、英語圏でない日本において、日本人学習者の大半に、英語圏の文化や社会の価値ある一員になりたいという統合的動機づけ (integrative motivation) を図るのは困難な環境にあると考えられる。したがって、日本人大学生の EFL 学習者を対象とした英語教育において、内発的動機づけ (intrinsic motivation) を他の動機づけと共に検討することは、意義あることである。多くの研究は、これまで統合的動機づけと道具的動機づけに焦点を当ててきたが、内発的動機づけの研究はあまりされてこなかった (Ellis 1997)。この点からも、内発的動機づけの研究は有意義なものである。

内発的動機づけの一方法として、もし学習者が学習の目的とその目的に達成する方法が選択でき、自分の進歩を評価できたならば (self-directed)、学習に対する関心が出てくるという一つの可能性がある (Ellis 1997)。著者はこの内発的動機づけの方法理論に基づき、日本人の大学生が不得意と言われてきた英語でのコミュニケーション能力向上のために、学習者の自己決定に基づいた英語での討論を組み込んだ授業を試みてきた。その結果、英語での討論において、自己決定は学習者の動機づけになるという結論に達した (Kurahashi 2000)。この結論は、Behman(1964)によって示された、学習者を決定に巻き込むことは、学習の動機づけになり、それにより学習している言語の発信が増すという結論とも一致する。

以下は質と量の両面において予測される英語力の格差に対処すべく、グローバル時代に日本人 EFL 学習者の学習環境に対する考察を踏まえた上で実施した授業の詳細である。

#### 4. 授業の目標

- (1) グローバル時代に日本国内外の社会問題、情勢について関心を抱かせ、思考させる。
- (2) 英文資料選択 (受信)、ペアトークキング、討論等 (発信)、英語を実際に使用する機会を与える。

(3) 英語の使用を通して英語の読解力やコミュニケーション能力を育成する。

## 5. 実施時期と対象者

公立大学社会福祉学科1年生(44名、内女子学生35名、男子学生9名、短期留学経験者1名)を対象に2001年度前期に実施した。

## 6. 方法

### 6-1 自己評価(1)

学習者は各自のコミュニケーション能力を認識するために、学期当初、具体的な5項目と抽象的な5項目に関して自己評価する。(表1参照)

### 6-2 目標設定(1)

学習者は学習目標を明確にするために、学期当初に上記10項目に関して各自目標を設定する。(表1参照)

6-1と6-2において内発的動機づけを行なう。

### 6-3 討論のテーマ決定

第一に、学習者はそれぞれ授業外でインターネット、新聞、雑誌、書物等から討論のための資料を一つ以上選ぶ。学習者は資料を選択するという目的を持って、英語で書かれた記事、エッセイ等を読む。学習者が自分で資料を決めることで、英文の資料講読に内発的動機づけを図る。第二に討論のテーマ選択のために、学習者は一人ずつ資料の解説を授業内で英語、あるいは日本語で行う。学習者に資料解説を討論のトピックを選択する時の参考にさせることで、解説に道具的動機づけを図る。第三に学習者はトピックを各自決定し、3人以上5人以下で1グループを形成する。この場合、グループでテーマが異なる場合もある。テーマの自己決定により討論への内発的動機づけを図る。結果として、33のトピックから8のトピックが選ばれた(表2参照)。

### 6-4 英文資料の講読

それぞれのグループは選択したトピックの英文資料を授業内外で翻訳し、教師が添削指導する。目的はペアトーキングやグループ討論で使用する英単語や英語表現を学習し、なおかつトピックに関して思考することである。翻訳を教師が添削することで道具的動機づけを図る。

### 6-5 資料の紹介

グループ別に講読した資料の紹介を日本語で行う。学習者に他のグループの資料にも関心を持たせ、なおかつ所属するグループの討論をよりよいものにしようとする意欲や、競争心を抱かせる。そのことにより内発的動機づけを図る。

### 6-6 ペアトーキング

学習者がペアーを組み、英語で意見交換をする。この場合、必ず自分の意見を述べ、それに

関して相手の意見を聴く。この時役に立つと思われる英語表現は事前に教えて置く（資料2）。20分ぐらいで相手を変える。教師はペアトーキングに参加したり、英語表現の助言をする。ペアトーキングによりテーマに関して考えを発展させる。

#### 6-7 グループ討論

グループごとにチェアパーソンを決め、英語で討論を行う。教師は各グループを巡回し、英語表現その他の助言をすると共に評価する。教師の評価により道具的動機づけを図る。

#### 6-8 討論の報告

それぞれのグループのチェアパーソンは討論で出た意見を英語で報告する。その発表に対して教師と他のグループのメンバーは英語でコメントする。これは発表する内容をまとめることと、発表や他者の意見を聴く過程において、討論に価値を持たせ、各自がより高度な考えに到達することにより道具的動機づけを図るためである。

#### 6-9 レポートの提出

学習者は討論したテーマに基づき英文のレポートを提出する。教師はそれらを添削し、評価する。レポートの添削において、間違った文法は訂正し、内容の不明瞭な個所は下線でそれを示したり、書き直し例を挙げる。共通した誤りは授業中に指摘する。学習に意欲を持たせるために、教師の評価に不満足な学習者に対してレポートの再提出、またはスピーチを認める。スピーチにおいて、原稿を読むことはできるだけ避けさせる。教師と他の学習者はスピーチに対してコメントする。<sup>2</sup> 教師の評価やコメントによりレポートの提出やスピーチに道具的動機づけを図る。

#### 6-10 自己評価 (2)

更なる学習への内発的動機づけのため、学期終了後にコミュニケーション能力の到達目標の達成度を10項目に関して自己評価する。(表1参照)

#### 6-11 目標設定 (2)

更なる学習への内発的動機づけのため、学期終了後にコミュニケーション能力の到達目標を設定する。(表1参照)

## 7. 結果と考察

### 7-1 自己評価と目標設定

表1に示されているように、学習者の学期当初の自己評価では、抽象的な項目の「将来の計画が語れる」を選択した者は1人のみで、他は全部具体的な項目を選択した。学期末の自己評価でもこの傾向はほとんど変化なかったが、わずかに抽象的な項目の選択が増加した。「英語で討論ができる」と回答したのは1人のみであったが、大学生になるまで英語での討論を経験したことの無い学生に変化の兆しがわずかに出てきたと考えられる。しかし、一般的に学習者

の自己評価は、著者の評価よりかなり低かった。この原因には、学習者自身の目標設定（理想）が高いことと、クラスの約8割が女子学生であることとの関連も考えられるが、これは今後の検討課題である。

ところで、自己評価と目標設定に関して、既にできると答えた項目を目標項目に入れるなど、回答に矛盾がみられる。例えば、「挨拶ができる」を学期初めに43人（学期末に44人）選択しているが、目標として4人（学期末7人）掲げている。アンケート対象者は44人なので、「挨拶のできる」程度を考慮しなければ、これは明白な矛盾である。しかし、学期初めと学期末の目標を比較すると、全般的な傾向として、抽象的な項目を選択した人数が増加している。これは学習意欲の表われと解釈できる。

表1 自己評価と自己目標（複数回答も可）

具体的な項目	自己評価		自己目標	
	学期初	学期末	学期初	学期末
1 挨拶ができる	43	44	4	7
2 自己紹介ができる	31	40	8	9
3 道案内ができる	8	19	17	18
4 事物の描写ができる	3	8	10	14
抽象的な項目				
5 将来の計画が語れる	1	1	23	25
6 大学全般について語れる	0	1	8	9
7 専門科目（福祉）について語れる	0	2	29	31
8 政治・経済について語れる	0	0	6	7
9 時事問題全般について語れる	0	1	16	17
10 英語で討論ができる	0	1	13	21

## 7-2 討論のテーマの傾向

学習者が討論のために収集した資料の分野は、社会（7項目10人）と、医療（健康）関連（8項目8人）が圧倒的に多かった（表2参照）。そのうち学習者がトピックとして選択した項目は8項目で、社会の分野を2項目、11人が討論し、医療（健康）の分野を5項目、27人が討論した。医療（健康）問題、特に臓器移植と臓器提供に対する関心の高さが伺える。また、社会問題では、特にハンセン病に関する資料を4人の学習者が収集し、7人が討論した。討論をした時期が、ハンセン病の判決が出た直後であることと、学習者の専攻が社会福祉であることに起因すると考えられる。また、映画「パールハーバー」は娯楽としてではなく、むしろ歴史問題として学習者は扱っていたので歴史の分野に入れた（討論は日本での映画の封切り以前に行なった）。討論の内容も真珠湾攻撃に集中していた。学習者の選択した討論のトピックから判断すると、本授業の目標である「グローバル時代に日本国内外の社会問題、情勢について関心

を抱かせ、思考させる」ことが浸透したと考えられる。

表2 ディスカッションのトピック

社会
1. A Fight to Make the Front Page: Lawsuit Prompts in-depth Coverage of Hansen's Tragedy (7人)
1-2. Hansen's Patients Hope for Dignity in Society's Eye
1-3. Koizumi to Try to Settle Issue of Hansen's Appeal
1-4. State Must Pay Hansen's Patients
2. Brain Disorders Neglected in Poor Nations, Panel Says
3. DNA Hunt in 1996 Rape-slay
4. Home Birth Case Heads to Jury (4人)
5. Hunger Strikers Push for School
6. Stupid and Arrogant in a Disneyland World
7. Yakuza Boss Arrested over Real Estate Conspiracy
歴史
1. Japan Calm about "Pearl Harbor" (5人)
1-2. Nation's Film Critics Bomb "Pearl Harbor"
1-3. "Pearl Harbor" Top Weekend Film
政治
Bush's Tax Plan Giveth, but also Taketh away after 2004 Vote
医療 (健康)
1. A Question of Ethics (5人)
2. Cell Phone Risk still Unknown: Congress (5人)
3. Female Smokers Found to Have Higher Risk of Bladder Cancer (7人)
4. Launch of the Step WGN Odyssey Almas Manufactured with Nursing Specifications
5. Lawmakers Propose Smoke-free City
6. New Twist in Cases over Right to Die Patient is Twilight State, Not in a Coma (6人)
7. New Trends in Health Care Equipment
8. No Regrets about Organ Donation: Husband (5人)
産業
1. Automakers Keen to Offer Wheel Chair Models
2. Bigger or Faster?
3. Harvey Ball, Creator of the Smiley Face, Dead at 79
4. McDonald's Waving Goodbye to Cash
教育
1. A Mother's Advice : "Don't ever Give up"
2. Elementary School Teachers to Run English Gantlet
スポーツ
1. Ichiro, Mariners Doing Well in All-star Voting
2. Mariners Piling up Roadkill
3. 76ers' Iverson Sucks It up

天候・気候
1. Flood Crest Threatens Siberia City 2. India's Quake Mystery Solved
その他
1. Does Your Dog Bark a Lot 2. "Hakata Doll Festival" Opens 3. Japan Garden Honored in Britain 4. You Think Osaka is the Same as Tokyo? 5. Very Dangerous Liaisons

(分野内はアルファベット順である。網掛けのトピック8が選択され、かっこ内の人数は討論に参加した人数を示す。)

### 7-3 学期末アンケート結果

表3の学期末アンケート調査によると、討論のテーマを自己選択できることで93%が討論に対する関心が持てた。また、88%が一斉授業で資料を日本語に訳すより、グループで訳す方に関心が持てた。ペアトークングでは91%が相手の意見が参考になったと回答しているが、自分の意見を伝えることができたと回答したのは42%に留まっている。これは表1の自己評価同様、著者の評価よりかなり低い。グループ討論では、クラス全体で一つのテーマを討論するよりも、グループごとで異なるテーマを討論する方に80%が関心をもち、90%が自分のグループの討論を他のグループよりよいものにしたと思った。この結果は、アンケート項目の1と関連し、興味のある討論のテーマを自分で選択し、討論することで関心が持てたと考えられる。しかし、自分のグループの討論報告に関して、68%が関心を持ったのみであった。もっとも、81%が他のグループの討論報告に関心を持った。これは、自分のグループではチェアー

表3 学期末授業アンケート

5：強く思う。 4：比較的思う。 3：思う。 2：あまり思わない。 1：全然思わない。					
<b>討論のテーマ決定に関して</b>					
1. 各自が授業外にインターネット、新聞、雑誌等から討論のための英文資料を一つ以上選ぶことで討論に対する関心が持てましたか。	5	4	3	2	1
	人数 5	24	10	3	0
	% (小数点以下四捨五入)	12	57	24	7
2. 討論のテーマ選択に関して、他の人の解説に関心が持てましたか。	5	4	3	2	1
	人数 11	13	11	5	0
	% (小数点以下四捨五入)	28	33	28	13
3. あなたの選んだテーマに十分関心が持てましたか。	5	4	3	2	1
	人数 16	16	9	1	0
	% (小数点以下四捨五入)	29	38	21	2
<b>英文資料の講読に関して</b>					
4. グループで英語の資料を日本語に訳すことについて、仕事分担等うまくいきましたか。	5	4	3	2	1
	人数 21	10	7	3	0
	% (小数点以下四捨五入)	51	24	17	7
5. グループで英語の資料を日本語に訳すことについて、一斉授業で訳すより関心が持てましたか。	5	4	3	2	1
	人数 13	14	9	4	1
	% (小数点以下四捨五入)	32	34	22	10

ペアトーキングに関して						
6. ペアトーキングで意見交換するとき、“Useful Expressions”は役に立ちましたか。		5	4	3	2	1
	人数	5	10	15	10	1
	% (小数点以下四捨五入)	12	24	37	24	2
7. ペアトーキングで相手に自分の意見を伝えることができましたか。		5	4	3	2	1
	人数	4	5	9	20	6
	% (小数点以下四捨五入)	9	11	22	49	14
8. ペアトーキングで相手の意見が自分の考え方の参考になりましたか。		5	4	3	2	1
	人数	21	9	9	4	0
	% (小数点以下四捨五入)	49	21	21	10	0
グループ討論に関して						
9. 全員が同じテーマで討論をすることと、グループごとに異なるテーマで討論をすることとどちらに関心が持てましたか。		クラス全員	グループごと			
	人数	8	32			
	% (小数点以下四捨五入)	20	80			
10. あなたのグループの討論を他のグループの討論より、よりよいものにしたいと思いましたか。		5	4	3	2	1
	人数	8	16	14	4	0
	% (小数点以下四捨五入)	19	38	33	10	0
討論の報告に関して						
11. あなたのグループの討論内容を他のグループに発表することに関心が持てましたか。		5	4	3	2	1
	人数	3	15	10	11	2
	% (小数点以下四捨五入)	7	37	24	27	5
12. 他のグループの発表に関心が持てましたか。		5	4	3	2	1
	人数	8	19	7	7	1
	% (小数点以下四捨五入)	19	45	17	17	2

(2001年7月3日実施)

パーソン1人が発表したのみであるため、他の者が発表に参画している意識が薄くなったためと思われる。全員がクラスで発表する場を今後設けることも必要であろう。

#### 7-4 学年末授業アンケート

表4の学年末授業アンケートによると、本授業の目的の「グローバル時代に日本国内外の社会問題、情勢について関心を抱かせ、思考させる」ことができたことを回答3、4、6、8、11は示している。また、「英文資料選択、ペアトーキング、討論等、英語を実際に使用する」目標を理解した学習者もいることが、回答1、3、4、6、9、12、13によって示されている。さらに、「英語の使用を通して英語の読解力やコミュニケーション能力を育成する」目標が実践されたことを回答2と6は示している。アンケートの回答5で示されているように、楽しく授業に参加していた学生が一段と目立った。学習者が自己決定する余地のある授業では、学生は「楽しく」授業に取り組み、教師と学生の関係がうまくいくようである。しかし、その一方で否定的な反応もあり、この授業方法が一部の学習者には困難であることも指摘されている。

未解決の問題はあるものの、本授業は一授業内で学習者が英語を使用しながら(受信と発信しながら)、社会問題について考え、英語のコミュニケーション能力、読解力、英作文力を身につけることに動機づけされるよう展開されているとおおむね言える。

表4 学年末授業アンケート (自由記述式)

訳読方式の授業と本授業を比較して自由に記述して下さい。
肯定的な反応
1. 他の授業より話す機会が多いので、話せるようにないたいという意欲が湧いた。(4人) 2. 自分の考えを英語でディスカッションできるように少しはなった。(4人) 3. 書かれたものを「読む」だけでなく、自分で英語を「考え」「話す」という行為の訓練になっている。(4人) 4. 自分で興味のある英文を討論のために集めて、話すことができた。(4人) 5. 楽しかった。(4人) 6. ペアトークやグループトークがあるのはとてもよい。いろいろな人の考えに触れることができるし、英語力も高まると思う。(4人) 7. 訳読式だけでは、予習してきていないと眠くなる。英語で話せないので苦手だけど、眠くならない。(3人) 8. 他者の考えを聞くことができた。(1人)
否定的な反応
9. ペアトークは面白かった。しかし、英語で行なうのは難しかった。(2人) 10. 自分のレベルでは、高すぎる。(1人) 11. 考えがつくと思ったが、面倒だと思った。(1人) 12. 初めて討論みたいなことを試してみても難しいと思った。(1人)
その他
13. 今までの勉強は受験英語で、話したりできないことに気づいた。(2人) 14. 英文講読のときは、分かりやすかった。(1人)

(2002年1月1日実施)

## 8. まとめ

学習者のアンケート結果と、著者が授業中に指導した時の様子や提出した英作文から、学習者は学習目的、資料、討論テーマ等を自己決定することで、かなり積極的に英語の講読、討論等の授業内容に取り組むことができたと思われる。それは、学年末のアンケートの「否定的な反応」にさえも示されている。日本人の英語力の格差が著しくなると予測される状況下で、英語のコミュニケーション能力のみならず、他の能力の育成や、グローバル時代に世界の問題への関心とそれに対する思考が同時並行的に可能な授業を提案したい。

本稿は第40回 JACET 全国大会(2001年9月15日)にて口頭発表した原稿に加筆修正したものである。

## 註

- 1 著者がここで「世界共通語」と言う時、「国際英語」論や「英語帝国主義」論の立場からの発言ではなく、文化相対主義的な立場に立ちつつ、伊原（1999）の主張する「批判的」受信と発信を含むものである。「国際英語」論や「英語帝国主義」論の定義に関しては、伊原（1999）参照。
- 2 David Harrington and Charles Lebean (1996) 参照。本書によるとスピーチには三つのメッセージ (physical message、story message、visual message) がある。スピーチのコメントに関しては、本書を参考にして、学習者に姿勢、声の大きさ、視線、スピーチの内容の分かりやすさと論の展開の仕方等をコメントする時の基準にするよう指示した。

## 引証資料

- Bachman, J. 1964. "Motivation in a Task Situation as a Function of Ability and Control over Task." *Journal Abnormal and Social Psychology*. 69: 272-81.
- Berwick, R. and S. Ross. 1989. "Motivation after Matriculation: Are Japanese Learners of English still alive after Examination Hell." *JALT* 11: 193-210
- David Harrington and Charles Lebean. 1996. *Speaking of Speech*. Macmillan Languagehouse.
- Ellis, Rod. 1997. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford UP.
- Gardner, R. and P. MacIntyre. 1992. "A Student's Contributions to Second Language Learning. Part 1: Cognitive Variables." *Language Teaching* 25: 211-20.
- Kurahashi, Yoko. 2000. "Self-expression in English: Motivated Discussion." *AILA '99 Tokyo*. CD-ROM Organizing Committee of the 12th World Congress of International Association of Applied Linguistics.
- 伊原巧 1999. 「『国際英語論』と『英語帝国主義』論」『中部地区英語教育学会 紀要』29: 295-300.
- 伊部哲、西堀ゆり、山中秀三、原田園子 2001年9月15日. 「大学英語教育の危機!？」シンポジウム 第40回 JACET 全国大会 札幌.
- 船城道雄 1999. 「21世紀、このままでいいのか日本の英語教育—日本固有の英語教育と英語教育界の自律性」『中部地区英語教育学会 紀要』29: 267-272.
- 「私立中学授業数公立の1.5倍に」2002. 『朝日新聞』1. 4. 日刊.
- 文部省 1998. 「小学校学習指導要領」『文部科学省』オンライン ホットメール 2001. 12. 17.
- ・ ・ ・ . 1988. 「中学校指導書外国語編」開隆堂.
  - ・ ・ ・ . 1999. 「中学校学習指導要領解説—外国語編—」東京書籍.
  - ・ ・ ・ . 1988. 「高等学校学習指導要領解説外国語編英語編」教育出版
  - ・ ・ ・ . 1999. 「高等学校学習指導要領解説外国語編英語編」開隆堂.
- 村田年 2002 「新指導要領の語彙制限がもたらすもの」『英語教育』2: 20-22.
- 21世紀日本の構想懇談会 2001. 「21世紀日本の構想懇談会最終報告書」『首相官邸』オンライン ホットメール 2002. 1. 16.

## 資料 1

アンケート実施時期：2001年1月

調査対象学生：経営学部1年生116名

実施したアンケートの一部を掲載

1. 将来英語が必要だと思いますか。	合計	% (四捨五入)
① はい	99	88
② いいえ	3	3
③ わからない	10	9
	112	
2. 英語が使えるようになりたいですか。		
① はい	99	90
② いいえ	6	5
③ わからない	5	5
	110	
3. 大学で英語を学習することは必要だと思いますか。		
① はい	96	88
② いいえ	4	4
③ わからない	9	8
	109	
3-1. 3で「いいえ」と答えた人は、その理由を下から選んで下さい。 (複数の回答も可)		
① 独学するから	1	20
② 英語を学んでも将来役に立たないから	3	60
③ 学習しても力がかからないから	1	20
④ その他 勉強の仕方が分からないから	5	
	5	
3-2. 3で「はい」と答えた人は、その理由を下から選んで下さい。(複数の回答も可)		
① 独学は困難だから	37	19
② 国際社会で必要だから	67	34
③ 力がつくから	30	15
④ 将来仕事上で有利になるから	61	31
⑤ その他 カセットだけではイントネーションがつかめない 話したいから 学校でやらないとそのままやらなくなるから しゃべれたら格好いい	195	
	195	

## 資料 2

## Useful Expressions

What do you think of...?

What do you think that...?

What are your main reasons?

What is the difference between ... and ...?

For what purpose do you do that ...?

Under what condition did you ...?

In what situations can you ...?

How do you feel about...?

How do you feel that...?

How would you feel if ...?

How do you react when...?

How about...?

Why or Why not?

Do you think that...?

Do you think of ... as ...?

I think its' because....

I think maybe....

I think so.

I feel that....

I feel like ....

I'm not sure.

I guess....

I would probably....

I often notice that....

Of course not.

Not necessarily....

Not always.